

総説：秋田大学保健学専攻紀要24(2)：15 - 29, 2016

ヒトにとって死は不可避なのか (その2) 臨床医学と形而上学の交差点

新 山 喜 嗣

要 旨

おそらく、多くの人々が考える自分の死とは、主観的な体験としての自分のクオリアが消失する事態であろう。このクオリアは、脳の活動にそのつど随伴して生起する。このことから、死によって脳を含めた身体が崩壊するとき、クオリアも同時に「消失」するという考え方はごく自然なのかもしれない。しかし、クオリアは元来より、1個2個と数えることができるような数多性をもたず、また、周囲との境界を作ることもない。よって、クオリアは世界に存在する一般の個体のように「消失」することはない。死に臨んでクオリアに生起することは、それまで高度に組織化されて目まぐるしく変化をしていたクオリアが、徐々に未分化な要素に解体されて変化も減少してゆく事態である。そして、死の進行と共に脳が崩壊した最終段階で、クオリアはそれ以上の変化を完全に停止する。変化が全くないクオリアにとって、変化が生成する時間の流れも同時に消失する。もはや、クオリアにとって時間は凍りついたまま停止し、それ以後に時間が流れることもない。このことから、自分にとっての死の核心を、「永遠」のクオリアの非在と捉える者がいたとしても、クオリアには「永遠」という時間の流れは付随せず、その限りで自分に未来永劫の死が到来することはありえない。

承前

以前までの章と章では¹⁾、自然科学の生物学的な規範にできるだけ沿いつつ、死が不可避か否かを検討してきた。しかし、とりわけ人間の死を問題にするようなときには、経験的世界の合理性をはみ出した超越的世界の秩序についても問題としなければならなくなり、もはや自然科学の規範だけに従うことはできなくなる。したがって、今後の章では、死が内包する同一性や時間といった形而上学の問題群にも躊躇せずにコミットしてゆくことになる。ただし、その前に次の章において、われわれの主題であるヒトの死が、臨床医学ではどのように扱われているかを確認する作業を経ておきたい。それは、ヒトが死に至る過程で何が消失するかを確認する作業でもある。この章での確認を経た上で、本小論全体の中でもっとも主要な論題となる死の形而上学について 章～ 章で見てゆきたい。

ヒトはいつ死ぬのか 生と死の境界はあるのか

1. 臨床医学における死の判定

少し驚かれる読者の方もおられるかもしれないが、実のところ医学のなかには元来「死の定義」は存在しておらず、「死の判定基準」だけが存在する。つまり、ヒトの臨終の時にヒトの身体にどのような変化が起こるかという知識の集積があるだけで、生の終末点が何を意味するのかといった問への答は医学には用意されていない。よって、そのような問に答える代わりに、医師の仕事の一つである死の判定に関わる基準について、医学はこれまで様々な議論をしてきたのである。

二つ存在する死の判定基準

本邦の多くの人々にとって、死に関わる判定基準と

しては、「脳死」の判定基準をこれまで耳にする機会が多かったかもしれない。これは、肝臓や肺などの臓器移植を実施するために、臓器の提供者については脳死をヒトの死と捉える必要が生じたからである。本邦の脳死判定は、深い昏睡、呼吸停止、瞳孔の散大、脳幹反射の消失、脳波が平坦であることからなる5つの条件が、6時間続けて存在するときに脳死と判定される。

しかし、このような臓器移植を目的とした特殊な状況を除けば、大多数の日本人に関する死の判定は、心停止、呼吸停止、瞳孔散大からなる「三徴候」によってなされる。ちなみに、この三徴候のうちの瞳孔散大は、脳幹もしくは脳全体の機能停止の指標である。先述の脳死判定の条件よりも項目数は減っているが、新たに心停止が加わっていることがわかるであろう。つまり、この三徴候は「心臓死」とも呼ばれ、それは、本邦を含む多くの国々においてこれまで長い間、心臓の停止こそがヒトの死においてもっとも中心的な要件であると考えられてきたことに由来する。

このような一般の三徴候による判定基準とは異なる、先の脳死というもう一つの判定基準が存在するのは、次のような事情による。すなわち、後述するように死が進行する過程では臓器によって組織が不可逆的な変化をきたすまでの時間が異なり、たとえば肝臓や肺などのように、心臓が拍動を停止して全身の血液循環がなくなるとすぐにも組織の機能崩壊が始まる臓器もある。そのために、心拍動がまだ存在している脳死の段階のドナーからの臓器摘出が必要であり、このために三徴候とは異なる新たな死の判定基準を近年新たに設ける必要が生じたのである。

死の「三徴候」の相互性

さて、われわれ医師が臨死期にある一般の患者を看取るような場面では、三徴候がすべて揃うことが死の判定の条件となるが、この三徴候はそれぞれ独立に相当な時間をあけて出現するわけではない。多くの場合では、いくらかの時間的差異はあるものの、三徴候はほぼ同時に進行してゆく。それというのも、三徴候に関わる生理的機能は互いに自身の機能の維持を他者に依存する関係になっているからである。すなわち、心臓の機能が低下すると、脳を循環する酸素を運ぶ血流の量が減少するために脳全体が障害を受けるが、とくに脳幹部の呼吸中枢の障害は呼吸運動の低下をもたらす。脳は全身の臓器の中でもっとも低酸素に脆弱であり、心停止後、蘇生開始まで3分の経過で50%が、5分の経過で70%がいったん蘇生したとしてもいずれ死の転機をとるとされている。これは、心停止による動

脈血からの酸素供給が途絶えるとただちに脳内の神経細胞が不可逆的な変化を起すことに起因している。一方、呼吸機能が低下すると、血液の酸素飽和度が低下してこのときにも脳全体に低酸素状態が発生し、このとき、脳幹部の循環中枢が障害されるために心臓の収縮活動の低下がもたらされる。このように、臨死期においては三徴候に関わる生理機能の低下が負の循環をしてゆき、ついには三徴候が出揃うことになる。

植物状態と脳死

ところで、低酸素状態に対する脳の脆弱性は脳の部位によって異なり、大脳皮質が脳幹部よりも脆弱であり、脳幹部では呼吸中枢が循環中枢よりも脆弱である。このため、脳の中で低酸素にもっとも脆弱な大脳皮質だけが障害を受け、これによって意識障害が生じているものの、脳幹部の呼吸中枢と循環中枢の機能はまだ残存しており、そのために自発的な呼吸と心拍動が長時間維持されている状態が発生しうることがあり、これがいわゆる植物状態である。ただし、心拍動については、仮に循環中枢の機能が完全に消失した段階でも、もし血液から十分な心臓への酸素供給があれば、心筋は自律的な収縮能力があるためにその後も心臓は動き続けることになる。このような、脳全体の完全な機能消失と自発的な呼吸活動の停止があるにもかかわらず心臓だけが拍動している状態は、人工呼吸器（レスピレーター）の装着によって始めて可能となる。逆に言えば、「脳死」にあたる状態は、1970年代に普及しはじめた人工呼吸器による人工的な産物である。

有機的統一の瓦解としての死

先述のように、本邦では臓器移植を目的とする場合に限って脳死をヒトの死と認めるようになったが、ただし、目的のいかんによらず脳死をヒトの死とする考え方もある。つまり、人は有機的統一体であり、脳はその統一を司る器官であるが、その脳の死は有機的統一の喪失にあたることからヒトの死にあたるという考え方である。この考え方の基礎には、脳死になればすぐにはなくとも早晩死に至るという経験的事実がある。実際に、人工呼吸器を装着しつつ脳死の状態になった患者においても、半数は数日以内に、大多数は1週間以内に心臓の拍動は停止して死へと至る。ただし、早晩という将来の予後によって死とする考え方は、死を現在から未来に向かって進む時間の流れの一環として捉えており、死は静止した時間の一点でも死たる存在として捉えることができるという、われわれの素朴な理解に背くことになるかもしれない。この死と時間との関係については、最終章の 章でそれを主題とし

た議論を行う予定である。ただし、近年では投与薬剤の工夫によって、脳死の状態でも半永久的に心臓の拍動が維持される患者も出現しており、脳死をもって死とすることの根拠としていたわれわれに与えられた経験的な事実が、むしろ今度は脳死が有機的統一の瓦解をもたらすという考え方の反証になりつつある。

「心」のありかとしての脳

もっとも、われわれが脳死こそがヒトの死であると捉えるときには、脳が身体の有機的統一の中核であるとする根拠とは別の、もう一つの重要な根拠を素朴に共有しているのではないと思われる。すなわち、われわれには、脳という器官は、ヒトが思考をしたり、感情をもったり、意志をもったりする、いわば「心」がその中に入っている特別な器官であるという、脳に対するほぼ共通した理解があると思われる。ところで、われわれによって「心」という言葉がもち出される際には、「心」は少なくとも次の二つの意味を含んでいると思われる。一つ目の意味は、「心」は、思考、感情、意志といった様々な「精神活動の能力」にあたるというものである。二つ目の意味は、「心」は、喜んだり、驚いたり、悲しんだりといった生きているときの様々な「体験の主体」であるというものである。だとすれば、この両方を司る脳における部位は、脳全体の中でも大脳皮質であり、中脳、橋、延髄からなる脳幹は、生命機能を維持する重要な部位であるにもかかわらず、おそらく「心」というものに直接的には関与していないと考えられる。

このような考えに従えば、脳幹の機能が保持されているために自発的な呼吸と心拍動が残存するものの、大脳皮質はすでに不可逆的な神経細胞の変性を全般的に蒙っているような完全な植物状態の場合には、今後において「心」を再び取り戻すことはない。よって、その点ではそのような植物状態と脳死との間に差異はないことになる。もっとも、植物状態とみなされた患者の中にはすべての大脳皮質の細胞が死滅していない患者も含まれ、そのような患者では将来に意識が回復する可能性が残されている。また、大脳皮質の機能が不可逆的に停止した患者であったとしても、近親者の心情としては自発的に呼吸をしている人間とそうではない人間とを同列にみなすことができないと思われ、そのような心情を重視すべきという意見があるのも事実である。しかし、本小論の基本課題はあくまで死者にとっての死という一人称的な死を問うことであり、近親者にとっての死という二人称や三人称の死は別の水準での問題となる。一人称としての「心」と脳との関係については、後の章で再び主題として取り上げる

予定である。

2. 「死の瞬間」というものはあるのか

死の時点はどこに定めるか

先の節の最後で、植物状態の不可逆性について触れたが、この不可逆性は植物状態だけでなく、脳死においても死の判定に関わる重大な要点となる。脳死判定における5条件が6時間持続するという項目は、この不可逆性の確認を意味する。ちなみに、脳死の時点を決めるかという問題については、最初の5条件の出現から6時間経過した後の再確認をした時点にするか本邦では取り決められている。ただし、死を死に近く人の一人称的な視点から捉えようとしたときには、最初に5条件が出現した時点に遡ってそれが死の時点となろう。実際に、本邦で脳死の判定基準を作製する段階では、5条件が最初に出現した時点を死亡時刻にするべきという意見も提出された。このように、移植を進める上での現実的な運用規定として、先のような取り決めが存在するにすぎない。

「死亡時刻」とは何か

それでは、移植と関係しない多くの人々にとって、死の判定が下される時点はどのように定められているのだろうか。死の判定は、前述のように三兆候を指標とすることによって行われるが、少なくとも脳死判定のときのように一定の時間をおいて再評価するようなことはしない。われわれ医師は、三兆候が揃い、かつ、これら三兆候が概ね不可逆的であると判断したときに、ご家族に「何時何分、ご臨終です」と告げ、死亡診断書にもその時刻を記し、その後はこれが公的な死亡時刻として通用することになる。しかし、今しがた述べたように不可逆性の判断はあくまで「概ね」であり、ときに臨死期にある人間の身体が公的な死亡時刻と合致しない反応を示すことがある。つまり、ご家族に臨終を告げた直後にモニターの心電図が再び心拍動を示す波形を打ち出したり、突然に呼吸様の胸部の動きが出現したりすることがある。このようなとき、医師の側はこれら身体の反応が生命を維持するに足る活動ではないことを理解しているが、見守る家族にとっては「まだ死んでいない」、もしくは、「生き返った」という感覚をもつに十分な身体の反応であろう。このようなとき、家族と医師ではどちらかが誤った判断をしていることになるだろうか。

生と死の境界の曖昧さ

おそらく、家族と医師のどちらも誤りは犯していな

い。実のところ、ヒトの死はゆっくりとしたプロセスをとり、したがって、生と死の狭間は常に曖昧なのである。つまり、われわれ人間の生から死への移行の部分には、行きつ戻りつの時期が少なからず介在するという事実が、経験的世界の出来事として存在するのである。さらに、三兆候に限らず全身の臓器に目を移せば、事態は一層に複雑となる。なぜなら、個々の臓器によって組織や細胞が崩壊するまでの時間がまったく異なる。たとえば、肺や肝臓では心臓の停止後ただちに崩壊が開始するが、腎臓では1時間後、角膜では10時間後まで崩壊は始まらない。臓器移植において、肺や肝臓の移植の場合にはドナーがまだ血液循環が保たれている脳死の段階であることが必要であるのに対し、腎臓や角膜の移植では心停止後のドナーからのものがかまわないは、このような心停止後の各臓器において崩壊までの時間に差異があることに由来する。よくわれわれが耳にする、死体でアゴのヒゲが伸びたという逸話は、その半分の原因は毛根細胞が死後も数日間生存していることにある。

「死の瞬間」という伝説

それにもかかわらず、われわれはいつの日からか死の瞬間というものがあるはずである、と信じるように仕向けられてきた。言い方を変えると、われわれは生と死の中間段階を厳しく禁じられてきたのである。これには、いくつかの理由があるであろう。一つ目の理由として、法的人格には生と死の中間がありえないことが挙げられるだろう。つまり、法的にヒトは権利義務の主体であり、基本的人権も保障されているが、それらは生誕の瞬間に出現し、死の瞬間に消失することが求められている。二つ目の理由として、多くの共同体で生と死が不明確な存在を忌み嫌うことを、文化人類学の知見は指摘している。すなわち、そのような存在は不浄や穢れに満ちており、ときには禍を呼ぶものとされてきた²⁾。三つ目の理由として、宗教的教義の存在が挙げられよう。すなわち、多くの宗教の教義において、臨死にある人間はある時点をもって「この世」の存在ではなく、「あの世」に向かって旅立つ存在に化すことになる。

ゆっくりとした死のプロセス

しかし、前述のように実際における臨死の場面では、死は長さが一様でない緩徐な経過をたどる。つまり、身体細胞のゆっくりとした死滅を意味する「分子死 (molecular death)」は言うに及ばず、生命統御機能の停止を意味する「身体個体死 (somatic death)」についてもある程度の時間幅をもって進行する。筆者

は医師として三十年程度の経歴をもつが、小説や映画でみられるような最期の言葉を残してその直後に忽然と果てるといった光景はついに目にしたことがなかった。そもそも、意識水準を反映する器官である大脳はもっとも身体の異変に敏感であり、死が迫っただいぶ以前から臨死期の人々は意識障害のために健康時のような思考や会話をする能力は失われている。それが、死亡時刻とされる時点の数週間前からのこともあれば、数時間前からのこともある。したがって、小説や映画のような光景は、起こりようがないのである。

不確かな死

このように、たくさんの医療機器が発達した現代にあっても、死の瞬間をまがりなりにも定めることにはしばしば困難が付きまとう。まして、医療機器がまっとなかった時代には、呼吸が完全に停止したあとも本当に死亡したかどうか周囲が確信をもつことができず、おそらく早期死体現象である死斑、死後硬直、死後冷却などが出現して初めて完全に死亡したことを確信したものと思われる。ちなみに、本邦の古代では身分の高い人物が死亡したときには、殯 (もがり) と呼ばれる死者儀礼が行われ、本葬までの長い期間にわたって遺体を殯宮という建物に仮安置した³⁾。その目的としては、死者の復活を願ったり、死者との別れを惜しむなどがあったが、それ以外に、本当に死亡したか絶対的な確証を求めることがあったとされている。そのときには、晩期死体現象である自家融解、腐敗、白骨化などを目にするこで、ようやくその高貴な人物が死亡したと確信するに至ったものと思われる。

死の「不可逆性」とは何か

この本当に死亡したかどうか不確定である点は、現代においても災害時に「心肺停止状態」で病院に搬送されたとする報道がそれをよく表していると思われる。現場に急行した救急隊は明らかな死亡が確認されない限り、医師のもとに搬送することが基本とされている。明らかな死亡とは、対象となる身体において断頭、躯幹の離断、腐敗、ミイラ化などが認められたときである。そのような状態でないときには、搬送先で医師が最終的な死亡の確認をすることになる。一見すると最初に心肺停止状態が確認された時点で死亡は確実に見えるが、それでも医師が三徴候の「不可逆性」を確定する作業をする。このように不可逆性を死の指標とすることは、先にも述べたが、死を存在としてみなさず、死を時間の流れの中にある事象とみなす行為である。そして、さしあたり死を確定する作業を医師がするときには、先述のようにヒトの臓器は個々に死滅す

る時間を異にすることから、身体の有機的な全体性を想定し、そこに不可逆性という物差しをあてることになる。

この不可逆性という物差しは、たとえば次のような場合にも威力を発揮する。それは、心臓の手術などで人工心肺を使用するときには、自発的な呼吸と心拍動を人為的にいったん停止させることになる。この間、手術の対象者は死亡しているかと問われると、おそらくわれわれはそれを否定することであろう。われわれは、対象者においてやがて自発的な呼吸と心拍動が再開することを知っているが、このときは不可逆性の物差しを取り出しているのである。

しかし、この物差しも万能ではない。それは、2016年の現在において回復可能性がゼロな状態でも、今後の医療技術の進歩によって2036年には回復可能性がゼロでないということは起こりうるからである。すなわち、医療技術の進歩といった偶然的な要因によって、絶対性をもつものとされる死が規定されるという奇妙なことが起こるのである。そもそも、人間の生そのものが“死に向かう存在”であるとする視点をとったときには、不可逆性の原理にあまり強く拘泥すると、われわれは生と死の分水嶺を遠く生誕の時点あたりまで押し戻すことになりかねない。

死によって失われるものは何か

死体から抜け出す「心」

前章では死を何らかの機能の喪失と捉える限り、死はゆっくりとしたプロセスであり、そこに生と死を分ける臨界点をすぐには探し出せないことを述べた。にもかかわらず、現実には医師がさしあたっての死亡時刻を決定し、その時刻から24時間以上が経過してから、早期と晩期の死体現象が進行する途中の時期の頃に火葬がなされることになる。このとき、火葬される死者は業火の苦しみを体験するのだろうか。実際には、血液循環が止まれば低酸素状態に鋭敏な神経細胞はすぐに変性をきたし、これは末梢神経の知覚伝導路も中枢神経の感覚野も例外ではない。したがって、当然なことではあるが、火葬時に死者が熱さや痛みを感じることはありえない。しかし、死者儀礼の一環として死体を火葬するとき、こういった理由でわれわれは死者の身体に火をあてることに抵抗感をもたないのであるか。そうではないであろう。それには、人々が共有するもっと重要な理由があるであろう。それは、死者が火葬される時点で、すでに生にとってもっとも核心的なものが死体には付帯していないと、われわれは感じているのに違いないのである。その核心的なものこ

そが、前章でも言及した「心」に相当すると思われる。

「心」の二つの意味

前にも触れたが、「心」という言葉で意味されるものは、一つは思考、感情、意志などの精神活動に関わる「能力」であり、もう一つは死者が生きている間に受け取り続けてきたなまの「体験」であろう。ただし、前者の精神活動に関わる能力については、常にヒトの生死と符合するわけではない。なぜなら、脳の広範な部位に出血、梗塞、腫瘍などの原発巣をもつ患者や、重篤な認知症をきたす疾患をもつ患者の中には、精神活動に関わる能力のいくつかは、種々の程度にすでに発病時から死に至る時期とは無関係に失われている場合があるからである。また、脳の器質的な疾患以外のときでも、大脳皮質の正常な活動は心肺による酸素供給や肝臓と腎臓による血中の毒素除去など様々な要因によって維持されているため、重篤な疾患を蒙ればこういった身体臓器の不具合による意識水準の低下によって、死期よりはるか以前に精神活動に関わる諸能力のいくつかが消滅している場合が存在する。

したがって、死亡時刻とされる付近でわれわれが死者から奪われるとしているものの核心は、一定の精神活動を行ないうる能力よりも、これまでもっていた主観的な体験そのものの方であろう。このような主観的な体験は、現代哲学の「心の哲学」において「クオリア (感覚質)」の名で呼ばれるものに相当し、心的な生活のうちで内観によって知られうる現象的側面としての個々の質や感覚である⁴⁾。このクオリアについては、誰もが自分に備わっているものと感じており、さらに、よほどの独我論者でもない限りは、他人にも自分と同じく備わっていると信じているものである。言い方を変えるならば、いかに高度な人口頭脳を携えたロボットが将来作られようとも、そのロボットが最後までちえないとされるものがこのクオリアである。そして、ある一人の人間が受け取るクオリアは、その人間が生存する限り、生涯その人間に帰属し続けることになる。前述の死者の火葬について言えば、われわれは茶毘に付される死体には、このクオリアはもはや付帯していないと考えているのである。

「魂」の離脱としての死

もっとも、人類の歴史を振り返ると、死と共に死体から失われると考えられてきたものとしては、クオリアよりも人間の精神に関わる事柄のほとんどを受けもつ「魂」と呼ばれるものが長く、その座を占めていたものと思われる。それは、アニミズム的な原始宗教から世界宗教にいたるほとんど全ての宗教を通じて、あるいは、宗教から少し距離を置いたわれわれの日常的

な心性にあっても、死において身体から「魂」とされる何らかの存在が離れることが死の本質的な事態とされていたものと考えられる。もちろん、現代においても死をこのように捉える人々が多勢いることはまちがいない。そのような人々は、死者は、生前の記憶と性格特性をそのまま魂として保持したまま、来世へと渡河すると考えられているものと思われる。

クオリア 体験そのもの

ただし、20世紀後半からの医療技術の急速な進歩によって、ヒトの脳における形態や機能に関わる情報を、生前に細部まで知ることが可能となった。その結果、たとえば認知症の高齢者において、脳の形態的な変化や機能的な変化に伴って、それまでの人生における記憶やそれまでその人の特徴を形成していた性格特性を失うことがあることを、現代人はすぐ身近にいる人物で経験する機会が飛躍的に増えた。その結果、魂が受けもっていた多くの精神に関わる領域について、脳という物質的な存在にバトンが渡され、最後まで残ったものがクオリアであると言えることができるかもしれない。そして、ある人間が体験するクオリアが収斂する先はいつも同一のその人間であり、その同一性は生誕から死ぬまで一貫して保たれているとわれわれは考えている。

たしかに、クオリアについては、それが何であるかをクオリアがもつ内容によって説明することはむずかしく、自分もつ主観的体験の「これ」だよと直示的に指示するほかはない。しかし、クオリアの担い手としての自分に対する直観的な理解は、小学校の低学年の子供においてもすでに保持されているように思われる。なぜなら、このような年齢の子供でも、「生まれ変わったら蝶になりたい」といったふうに語ることができ、人間であるときもっていた記憶や性向などはすべてこの世に残したうえで、クオリアの担い手としての自分だけが来世に渡るといった、大人とはほとんど変わらないクオリアに関わる理解がなされているように思われる。

物理的世界の因果的閉包性

このクオリアと脳との関係については、後に続く章においてより詳しく述べる予定であるが、「心の哲学」においては様々な意見が提出されて今もって論争のさなかにある。そこで、いったん本章ではわれわれの多くが受け入れやすいと推量される、クオリアと脳との関係についての比較的穏当な考え方を出発点としたい。その考え方とは、クオリアはわれわれの脳という物質的な存在の活動に随伴（スーパーヴィーン）して出現

しているに過ぎないという考え方であり⁵⁾、この考え方をここでは随伴説と呼ぶことにする。この随伴説では、物理的世界はそれ自身で始めから終わりまで因果的に閉じた独立性をもち（因果的閉包性）、いかなる意味でも物理的世界がクオリアによって影響を受けることはない。たとえば、針を刺した指の「痛み」によって思わず顔をしかめるといった場合においても、「痛み」というクオリアが顔をしかめるといった物理的動作を引き起こしたとは考えない。このような状況を、随伴説では次のように説明する。すなわち、最初に指の痛みの信号を神経の求心性伝導路が脳の感覚野に伝え、その信号が脳でいくつかの段階で処理を受けた後に運動野に伝えられ、神経の遠心性伝導路からの信号が顔をしかめさせる筋肉の収縮を引き起こす。その時、この過程に対して「痛み」のクオリア自体は何の効力も発せず、単にこの過程と同期して「痛み」のクオリアが発生すると考えられるのである。

大脳の統御レベルとクオリアの随伴

それでは、われわれが体験するようなクオリアを、他の動物も同様に保持しているのであろうか。あるいは、どのような生物であれば保持しうるのであろうか。この問は、系統発生の上で大脳がどの程度にまで高度な情報統御を行えるまで発達した生物であれば、そこにクオリアが随伴するのかという問に置き換えることができるだろう。そして、このような問は即座に次のような問も惹起することになる。それは、ヒトの臨死期において大脳の統御機構がどの程度まで機能が崩壊すれば、大脳にはもはやクオリアは随伴していないだろうか、つまり、当該の人間は死しているのだろうかという問である。一方、この問は次のような新たな問も惹起することになるであろう。それは、ヒトが誕生にいたる個体発生の段階で、どの程度まで大脳の統御機構が作られれば、そこにクオリアが随伴し始めるのだろうかという問である。このように、クオリアの随伴の有無が物理的存在としての大脳における統御機能に依拠するとすれば、生がある状態と生がない状態の分水嶺をどこに求めるかという問題は、死の場面と生誕の場面に関しておそらく一連托生となるだろう。

大脳の発達とクオリアの発生

ここで、これまで本小論では関心を寄せてこなかった生誕の方に、いったん目を向けてみることにしたい。一般に生物種により生誕とされる時点は異なっており、鳥類や爬虫類では卵からの「孵化」であり、昆虫ではさなぎや終齢若虫からの「羽化」であり、植物では種子からの「発芽」であり、そして、ヒトでは母体産道

からの離脱としての「誕生」である。しかし、生誕を本小論での文脈に沿って捉える限り、これらはどれも生誕には該当しないと考えられる。すなわち、生誕をクオリアの胚胎として捉えるならば、ヒトではその時期は、受精後に神経系が徐々に構築されて最後に複雑な神経連絡の構造体としての大脳皮質ができあがるどころかの段階にあたるだろう^{脚注1)}。

この大脳皮質は、次のようにしてできあがる。最初、受精の時点から数えて第3週の時期に外胚葉から板状の神経板が発生し、第4週になると神経板は閉じて管状に変化をして神経管となる。やがて、神経管の壁は全部で3層となり、その第2層の外層から将来神経細胞に分化する神経芽細胞が発生する。同時に、神経管の頭側の末端は袋状に膨大し、脳の前基となる脳泡が形成される。胎生第5週から第6週になると、脳泡は左右の背外側に大きく突出して、左右一対の半球泡となって将来の大脳半球の前基となる。胎生第2月を過ぎると半球泡の壁は増殖して、前頭葉、頭頂葉、後頭葉、側頭葉と分かれてゆく。胎生第5月には大脳溝が出現し、胎生第7月には大脳回が出現する。その後、増殖はさらに加速して脳溝や脳回の構造は複雑となり、最後に総数140億個に達する神経細胞を収容する大脳皮質へと分化する。この大脳皮質が形成される過程の「ある段階」にて、われわれの脳にはクオリアが胚胎することになる。ただし、この「ある段階」をどこに線引きをして特定するかは、今のところ困難をきわめる。この困難が、個体発生上での中枢神経系の発生に関するわれわれの知見がまだ十分ではないことに由来するのか、そもそも、クオリアの胚胎は漸進的であり線引きは原理的に馴染まないことに由来するのか、意見が分かれるであろう。このことに関連するより詳しい議論は今後の章にゆずることにするが、後者のような意見は、クオリアの濃淡といったような、クオリアをある種の強さとして理解していることになる。

大脳の崩壊とクオリアの消失

それでは、今度はヒトの臨終時の大脳の崩壊に伴うクオリアの消失に関してはどのように考えるべきなのだろうか。一般に、臨死期では以前の章で述べたように、呼吸機能と循環機能が徐々に減弱するために脳は低酸素状態となる。低酸素状態では最初に海馬や大脳皮質の頭頂葉と後頭葉が障害を受け、その後に大脳皮質の全体が障害を受ける。ただし、この際に大脳皮質の全ての神経細胞が同時に崩壊するのではなく、その時の病態に応じた脆弱性をもつ神経部位から崩壊が始まる。大脳皮質内の神経経路は、興奮性神経系と抑制性神経系が複雑に絡み合っていて機能を果たしているた

め、部分的な神経崩壊の時期には神経活動の低下と一時的な神経活動の亢進が無秩序に混在する。そのような時期を経て、最終的に全ての神経活動は機能を消失する。この時に個々の神経細胞内では、細胞質が水分を吸収して拡大し、小胞体などの細胞小器官は膨化もしくは断裂し、核は収縮してゆくが、最後には全ての構造が融解の転機をとる。このような大脳皮質全体の不可逆的な変性に至る過程において、どの段階でクオリアが消失することになるかは、生誕のときのクオリアの胚胎と同様にその段階を特定することは困難をきわめる。また、困難の理由も生誕のときと同様であり、大脳皮質の崩壊に関わるわれわれの科学的知見が不十分なことに由来するのか、それとも、クオリアの消失が漸進的であることに由来するのかという疑問が残される。こういった疑問から派生するいくつかの論点は、今後の章での主要な議題とされることになる。

クオリアと輪廻転生

ところで、今しがた死に伴うクオリアについて「消失」と述べたが、場合によってはこのときのクオリアをヒトの脳からの「離脱」と捉える考え方もあるであろう。それと言うのも、近年において宗教を離れた視点から輪廻転生の可能性が議論されることがあるが⁶⁾、このときに転生するとされているものは離脱したクオリアの担い手であると考えられるからである。そして、このときに新たな転生先が決定したときには、クオリアの担い手は転生先の脳に「胚胎」もしくは「発生」するのではなく、新たな脳に「結合」とされることになろう。もし、われわれがここでこのような輪廻転生の立場をとるならば、本小論の主題である「死は不可避か」の問に対して、即座に「避けうる」とする答を出すことになる。なぜなら、生死を問われる主体はもはやヒトの身体や脳ではなく、始まりと終わりがなく永遠に存在し続けるクオリアの担い手がその主体となるからである。輪廻転生では、このようにクオリアと一つの生命体が一回の生の中で1対1の対応を作り、一回の生の中では様々のクオリアの収斂先は常に一人の人間とされることになる^{脚注2)}。

生の連続性とは何か

クオリアの収斂先

前章の最後で、クオリアの収斂先について言及した。ただし、このようにクオリアの収斂先としての「何か」が存在することや、この「何か」が同一性をもち続けることは、それほど自明なことではない。すなわち、強い観念論的な思考においては、その「何か」の存在

を認めずに、唯一個々のクオリアとしての直接経験のみを認めようとするかもしれない。すなわち、時々クオリアが一つにまとめあげられて、それに対して人称性が付与されることに同意しないかもしれない。たしかに、われわれの体験の流れの中では、それぞれのクオリアはいつも自分に所属するものとして体験される。また、そのようなクオリアの担い手としての自分についても、時間を通して同一のものとして体験される。しかし、先の観念論的な思考からは、これらの体験は自分についての二次的な反省的意識であり、可謬性をもちうる心理的事実にすぎないとされるかもしれない。そのときには、われわれの原初的な体験としてのクオリアは、そのつど出現する個々のものであるほかはないであろう。もっとも、クオリアをそのようなものとするに飽き足らずに、それらを一つにまとめ上げるものをあくまで探そうとすれば、われわれはクオリアの脳への随伴性に依拠することができるかもしれない。このときには、生きている間は同一性をもって存在し続ける物理的存在としての脳に、クオリアを統一する役割を求めることになる。

極限概念としての「心」と「身体」

ここで、脳の同一性を検討の対象にすることにしたいが、その前に、一人の人間を物理的な存在として捉えるときには、脳に限定せずといったん身体にまで射程を広げることしたい。それというのも、少なくとも生きている時点では脳は単体でその機能を発揮することはできず、循環、呼吸、代謝に関わる身体全体の臓器が絶えず順調に働くことにより、はじめて脳はクオリアが随伴しうるような機能を発揮しうるからである。言い方を変えるならば、死体であるときは別として、生きている身体から脳を髄膜が硬膜を境にして取り出すことは、脳を機能として捉える限りは意味をなさないことである。さらに、われわれが心の中で生起していると捉えている体験も、多分に身体の場所や身体の動きと連動したキネステゼ的な体験である。このような体験の中で、より統合化されて身体的事実から相対的に独立したものを仮に「心」の名で呼び、そうでないものを仮に「身体」の名でわれわれは呼んでいるに過ぎないのかもしれない。そこで、本小論では人間の同一性について検討することから開始したい。

人間の同一性と質的同一性

さて、われわれは同一性について次のことを確認しておきたい。それは、生や死を主題にしようとする

とき、身体の同一性を質的同一性としているのか数的同一性としているのかという問題である。質的同一性とは、同じ型式の鉛筆は未使用であれば質的同一性をもちうるであろうし、数的同一性とは、同じ型式の鉛筆の中で失くした1本がまた見つかったと言う時には、数的同一性のことをわれわれは述べているのである。

おそらく、人間の同一性を、質的同一性にもとめようとするならば、われわれはすぐにもいくつかの困難に遭遇するであろう。たとえば、子供の時の外見や性格と大人の時のそれが大きく異なることはあっても、人間の同一性が否定されることはないだろう。また、人生の最終段階では数十%の確率で何らかの認知症に罹患するが、それまでの記憶や性格特徴をすべて失くしたとしても、当人を同一人物としてわれわれは扱うだろう。これらは、ある人物が誰であるかといった人物同定において、われわれが質的同一性を求めているわけではないことを示している。

それでは、逆に完全に質的同一性が確保された場合はどうであろうか。かつてある哲学者が、地球にいる一人の人間の身体構造を分子レベルまで解析した情報を火星に転送し、その情報を基に火星にある地球と同じ分子の材量でそっくりの人間を作製するといった思考実験を行った⁹⁾。その時に、二人の外見、思考、行動がまったく同一であっても、少なくともクオリアについては、火星にいる人間のクオリアと地球にいる人間のクオリアは別個のものであると考える人々が多いであろう。そもそも、現代では火星転送といった大掛かりな思考実験をしなくても、科学技術の進歩はクローン人間を技術的には作製可能な段階まで来ている。もし、そのクローン人間が自分と完全な質的同一性をもったとしても、元の人間はクローン人間に対して、もう一つの独立したクオリアを有する人間であると感じるのである。

人間の同一性と数的同一性

このように、われわれは人間の生涯にわたる同一性を質的同一性に求めるのはむずかしそうであるが、それでは数的同一性についてはどうであろうか。少なくとも身体の全ての要素に関する数的同一性を、人間としての同一性の条件として求めることには、おそらく多くの人々が同意しないであろう。実際に、髪の毛は毎日脱落するであろうし、皮膚の表皮は刻々剥がれるが、これらを自己の同一性の危機と捉える者はいないであろう。おそらく、われわれにとっては身体を形成する主要な構造があってそれが数的同一性をもつ限り、その人間は同じ人物であり続けるとされているように思われる。ところが、以前の章で述べたように、

われわれの身体を作る細胞は分裂増殖を繰り返し、増えた数にほぼ相応する数の細胞がアポトーシスによって消失してゆく。これにより、全部で約60兆個の細胞よりなるヒトの身体では、1日に約3000億個の細胞が入れ換わる。身体の器官によって、入れ換わるサイクルは異なるものの、数年単位でほぼ全身の細胞は以前と異なる細胞となる。

脳の数的同一性

このように、ヒトの同一性を、身体を形成する主要な構造の数的同一性に求めようとすれば、ヒトの生涯から死亡までの人生はいくつにも分断され、一人の人間はその断片の一つに相当するようにも見える。われわれは、人生の中で何度も死を迎えるが、自身がそれに気づかないだけなのだろうか。しかし、再びわれわれのクオリアと直接の関係をもつとされる脳に関心を戻すと事情は大きく異なってくる。それは、脳全体の細胞を見渡すと、脳の構造を作るグリア細胞はたしかに分裂増殖をして細胞の入れ替わりを繰り返す。しかし、グリア細胞に力学的に支えられて存在する神経細胞は、心臓の心筋細胞などと同様に生誕時から細胞分裂をすることがなく、生涯に渡ってそのままの状態が存在する非分裂系細胞である。そして、この神経細胞こそが脳内で複雑なネットワークを作り、脳がもつ情報伝達の中核としての役割の本体をなす細胞である。はからずも、クオリアが随伴する物質的存在としてもっとも相応しいと考えられる脳内の神経細胞は、ヒトの誕生とほぼ前後する時期に大量に出現し、生きていた間にそのままの細胞であり続け、ヒトの死の進行と共に全て消滅してゆく存在である。いまや、一人の人間における個々のクオリアを一つにまとめあげる根拠を、物質的存在の数的同一性に求めようとしたとき、脳内の神経細胞こそがそれを保証するものであるように見えてくる。

身体の分子レベルでの入れ替わり

だが、ここまでの議論は、身体の各組織で毎日行われている新陳代謝を全て無視した議論である。もしも、身体を分子レベルの細部まで見れば、細胞内の構造を作る分子はめまぐるしく入れ換わっている。この入れ替わりは「動的平衡」などの名前で呼ばれ⁹⁾、これは脳内の神経細胞も例外でない。つまり、脳内の神経細胞のような非分裂系細胞においても、それを構成する分子自体は絶えず別のものに入れ換わっていることになる。この分子レベルでの代謝回転の早さは、身体各部位で異なっており1秒以内の早い物質から、赤血球にあるヘモグロビンや水晶体のクリスタリンのように数

カ月と長いものまでである。ちなみに、DNA から一時的に情報を受け取ってタンパク質を作ることに寄与するメッセンジャーRNAは、その役目を終えると数十分ほどで消失する。

数的同一性をもつ神経細胞の DNA

しかし、ここでも一つだけ例外が存在する。それは、細胞内の DNA 鎖である。DNA 鎖を作る個々の核酸は、1つの糖分子と1つのリン酸基と1つの塩基の3つが結合して出来ているが、この核酸自体は代謝回転をすることがなく細胞内で同一のまま存在すると考えられている。なぜなら、この核酸を構成する窒素元素を放射性同位元素で標識すると、たとえ細胞分裂を繰り返した後でも、いずれかの分裂後の細胞の中に標識された窒素元素が停留し続けていることを確認できるからである。したがって、脳内の神経細胞のように、分裂増殖をせずにアポトーシスで脱落することがない細胞では、細胞内の DNA は数的同一性をもちつつ生涯同じものが存在し続けることになる。そもそも、この DNA は1個の生物の全情報を自身の中に備え、その情報を新たに生成する細胞に伝達する基礎となる物質である。まことに皮肉であるが、質的同一性を作る根幹となる物質が、それ自体は身体の中で唯一の数的同一性を保持する存在なのである。

点在する脳内の DNA

ここまで、われわれはクオリアを一つにまとめあげる条件を、物質的存在としての身体の中に探そうとしてきた。その結果、探し出されたものが神経細胞内の DNA であることは、それが奇しくも脳内にあることと、その出現と消失の時点が生物個体の生誕と死とされる時点にほぼ一致することから、一見すると理想的な対象が見つけたようにも見える。しかし、クオリアを一つにまとめあげる条件となるものは、脳内にバラバラに点在するものではなく、全体性をもった一つとして存在するものであろう。しかるに、脳内にある神経細胞の DNA は、たとえばヒトであれば細胞の核内である46個の染色体の中に、DNA 鎖として別々に折り畳まれて存在する。したがって、その限りでは DNA は1個の神経細胞の中でもバラバラに点在していると言えるであろう。さらに、個々の神経細胞は緻密な情報連絡網を作り、脳全体として一つの統合した働きをなすと言えるが、細胞の核内にある DNA 自体は、神経の情報伝達の本態である細胞の脱分極といった電気的な現象に対して直接的な作用をするわけではない。別の言い方をすれば、DNA はわれわれの「心」に対応する脳内の神経活動とさしあたっては無関係で

ある。このことからすれば、前述のように脳内には約140億個の神経細胞が存在するが、いまや、膨大な数のDNAが、隣の細胞のDNAの振る舞いを知らないまま点在しているようにも見える。

死せる身体の主体は一つか

クオリアをトークンとする前提

これまで、われわれは、個々のクオリアは一点に収斂すべきであるとし、その上で、その収斂を成立させるべき条件をもとめようとしてきた。それはとりもなおさず、多くの人々が共有すると思われる生と死に対する考え方が存在すると思われ、できるだけそれに沿おうとしてきたことを意味する。その考え方とは、人間は生をもつとき一貫してクオリアの担い手であり続け、一方、死に臨んではその担い手が消滅するといった理解である。そして、そのような理解に可能な限り沿うことを目指しつつ、クオリアという概念を軸に生と死を考察してきたのである。ただし、こういったクオリアの収斂先やクオリアの担い手に関する議論は、すでにクオリアに対して一定の前提を付与することによって成り立っていると思われる。その前提とは、クオリア自体が1個の個体であるトークンとして数的同一性をもつというものである。たとえば、ある時に指を針で刺して生じた痛みのクオリアと、かつて同じ針を刺した時の痛みのクオリアは、それぞれ別個のトークンであるとされているのである。このように、クオリアが個々にトークンであるとされてはじめて、それらが収斂する先についての議論もなされるのである。

トークンとタイプとの相補性

ところで、ある対象を‘トークン’として捉えるとき、その対概念である‘タイプ’を完全に排除できるかということ、それほどたやすくはないと思われる。たとえば、トークンという概念を説明するときに、TOMATOというスペルの中にTという種類のタイプが、トークンとして2個存在しているという例がよく用いられる。しかし、このときにTが2つであると数えられるのも、スペルの1番目のTと5番目のTがタイプとしての同一性をもつからである。別の例も挙げてみよう。川の上流から雑多な浮遊物が流れてきたとして、そのときにわれわれが木片が3個あると認めたとしよう。このときに、木片を3つのトークンとして別々に認めたわけであるが、その条件としてその3つには木の性質といったタイプとしての同一性が必要であったはずである。それがなければ、川の水面は雑多な浮遊物以上のものは存在しなかったはず

である。一方、タイプの方も、もしも眼前の浮遊物が別々にトークンとして分離されることを欠くならば、木としてのタイプ同一性も生じなかつたはずである。このように、トークンとタイプは互いに相補性をもつが、この相補性は、‘高い’があるから‘低い’もあるといった概念上の相補性にとどまらず、個体に対して数的同一性と質的同一性を付与するような存在論的な相補性として理解するべきであると考えられる。

クオリアの私秘性

それでは、クオリアに関わるトークン同一性はどのように成立しうるのだろうか。今しがた述べたトークンとタイプの相補性からは、クオリアにトークン同一性が成立するためには、クオリアのタイプ同一性も同時に成立することが必要である。ここで、われわれはクオリアがもつ核心的な特徴としての私秘性について確認をすることにしたい。前述のように、クオリアはあくまで自分だけの主観的な体験であり、クオリアを指示するときは自分の「この」クオリアというふうに行うしかできない。このようなクオリアの一人称的な性格は、他者のクオリアについてそれ自体を指示することが困難であることを意味している。すなわち、われわれが他者のクオリアについて言及するときには、自身のクオリアを他者に投影することにより類比的にそれを語るしかできない。

ときに、「クオリアの反転」について議論されることがある¹⁰⁾。これは、たとえば自分が「赤」と呼んでいるクオリアは、実は他者が「緑」と呼んでいるクオリアに相当し、自分と他者の間で赤と緑のクオリアが反転している可能性があるという議論である。しかし、クオリアは徹頭徹尾にわたり私秘的な性格をもつことから、自分のクオリアを他者のクオリアと比較することは始めから無意味である。したがって、そもそもクオリアが反転しているとするのも、あるいは、反転していないとするのも原理的にできない。このような自分と他者の間でのクオリアの比較の困難さは、実際に比較をすることができないといった認識論的な水準ではなく、‘自分’と‘他者’との差異がもたらす存在論的な水準に起因する事柄である。実のところ、自分自身の内部においても、今の痛みクオリアがさっきの痛みクオリアと同じかどうかといった比較はできない。なぜなら、さっきの痛みクオリアは、記憶にある今のクオリアとして代替でもしない限り、直示できないことについては他者のクオリアと同様だからである。

クオリアを数え上げることは可能か

このようなクオリアの徹底した一人称的性格は、タイプ同一性をもつ三人称的な性格とは相容れない。すなわち、タイプは共同主観的に承認されうる客観性を持ち、それ自体が一定のカテゴリーの枠に収まりうる。たとえば、赤という性質のタイプは色のカテゴリーに収まり、ラ音という性質のタイプは音階のカテゴリーに収まる。これに対して、一人称的なクオリア自体は、言うなれば、いくつかのカテゴリーをまたいだ体験であり、その体験を他者や自分に語る場面で二次的に何らかのカテゴリーで体験を切り取っているに過ぎない。したがって、体験される生身のクオリアは、三人称的なタイプとしての資格を元々もっていない。だとすれば、先のタイプとトークンの相補性から導かれることは、クオリアはトークンとしての資格も同時に持たないということである。このようにクオリアがトークンではないとすれば、クオリアは一般の個体をもつ数的同一性をもたないことになり、クオリアは1つ2つと数え上げることができるような対象とはならない。すなわち、クオリアは元来より数多性をもたないのである^{脚注3)}。

クオリアの弱い随伴性

クオリアがトークンでありえないとすれば、クオリアの物質的な存在としての脳への随伴性は新たに捉え直す必要がでてくる。結論を先に述べるならば、この随伴性はきわめて弱いものとならざるをえないであろう。なぜなら、クオリアの内容に影響を及ぼす脳内の物理現象は、元来より個別的な要素にまで分解可能であり、その一つ一つはタイプやトークンとしての資格をもつ。したがって、それらの個別的な要素が集合して一定の痛みや痒みが出現するときの脳内の総体としての物理現象もタイプやトークンをもつが、一方で、それに随伴する痛みや痒みのクオリアはタイプやトークンを有しない。このことから、脳内現象とクオリアが一对一の対応関係をもつといった、強い随伴性は存在しないのである。たしかに、指先を針で刺して大脳皮質の知覚野にある一定の領域の神経細胞が発火したときには、一見するとその発火と痛みのクオリアが一对一の対応関係で発生しているようにも見える。しかし、このときのクオリアの実体は、痛み以外にも音やニオイといった他の性質のカテゴリーで切り取ることができるような混然とした体験である。このように、クオリアの脳への随伴性はきわめて弱いものであると言えよう。

クオリアの凝集塊としての 私

先に、クオリアの収斂先となりうる条件を求めようとした。しかし、今やクオリアが数多性をもつトークンでないとすれば、クオリアは個々に収斂することもなく、同時に、クオリアの収斂先が形成されることもない。これまで、われわれはクオリアの担い手となるようなクオリアの収斂先を想定し、それに対して潜在的に 私 というような生や死の主体となる1個の存在をあてはめようとしていたのかもしれない。だが、ここまでの議論からすれば、このような方法で私を定立することには無理がありそうである。それでもなお、クオリアに私という存在の源泉を求めようとするならば、次のような方法があるかもしれない。それは、数多性や境界をもたないクオリアがある仕方でも凝集することがあれば、その凝集塊を私とする方法である。それと言うのも、クオリアは種々の性質のカテゴリーをまたぐような性格をもちつつ、かつ、個別性をもたずに時間の経過に伴って変容している。このようなクオリアを一定のカテゴリーや一定の時間の幅によって幾つかに分断することはもはや不適切であり、当初から凝集塊を形成していると言えるであろう。このように私をクオリアの凝集塊とみなす方法は、私の同一性に関わるアポリアを避ける有利を連れるかもしれない。なぜなら、今しがた述べたように凝集塊は通時的な凝集をも含むことから、一瞬一瞬の私 がどのように生涯にわたって同一であり続けることができるかという問題に対して、始めから無関係でいることができるからである。つまり、生まれてから死ぬまでの私 は、クオリアの凝集塊としてそっくり一括りに纏めあげることができるからである。

「自分は一人で逝く」のか

ここで、われわれは私をクオリアの凝集とみなしたときに帰結する、重要な点に注目する必要がある。それは、クオリアが数多性をもたないとすれば、クオリアの凝集塊も数多性をもたず、よってクオリアの凝集塊としての私 は一人二人と数えることができない対象であるということである。数えることができる対象は、あくまで人間の物質的存在としての脳であり身体である。このことは、ある一人の人間において1個の身体と1個の私 が一对一の対応関係を形成しているという基本的構図を取り払うものである。したがって、今まさに一人の人間が死に臨んでおり、その人間の脳や身体が1個消失するとしたときに、たとえそれに伴って私 が消失するとしたとしても、消失する私 の方は一つ二つといった数多性をもたない。言葉を換えるなら、一人の人間の死に対して、1つの

私の死が伴うわけではない。このことは、この自分に当てはめるときには特別な意味をもつかもれない。なぜなら、ある時代に生きた一人の自分が死を迎えるときに、自分の核心を私とする限り、決して「自分は一人で逝く」ことにはならないからである。

死後には永遠の死が待ちうけるのか

完全に消失しないクオリア

先の章で、死にあたって私 が消失すると述べたばかりであるが、実のところ、私 をクオリアの凝集塊と捉えたときに、それは正確な言述ではない。なぜなら、本来、消失したり出現したりする対象は、外部と明確な境界を作りながら、個体としてのトークン同一性をもつ対象である。一方、外縁がないクオリアの凝集塊は、外部との時空的な境界を作らないことから、それ自体がある時点を経境にして突然と消失することはない。このことに関するより正確な言述は、次のようなものであろう。すなわち、クオリアは個体のような有か無かといった2分法の存在性格はもたず、変化の強さや弱さで示されるような存在のグラデーションをもつ。したがって、死に臨んでクオリアの凝集塊で生起することは、それまで高度に組織化されて変化に富んでいたものが、徐々に未分化で単純な要素に解体しながら変化も減少してゆく事態であり、そのような意味において、存在の強さが限りなくゼロに接近しながら収束する事態である。このようなことがクオリアの凝集塊で生起している時期は、前章で述べたような死の進行に伴って脳が徐々に崩壊してゆく時期にあたるであろう。そして、ここでわれわれが留意すべきことは、脳が崩壊して単純な有機物質に分解してゆくどこかの段階で、脳はそれ以上クオリアに対して影響を及ぼすことがなくなるということである。このことは、死が進行するある段階で、ゼロに限りなく接近しつつも完全なゼロ値をとりえない淡いクオリアの凝集塊が、それ以降の変化を止めることを意味する。この変化を失ったクオリアの凝集塊にとって、その後の時間の進行はどのようなものであろうか。

変化を必要とする時間の流れ

それを知るために、いったん生ある時の凝集塊に備わっている「変化」に着目し、「変化」の一般的な構造を考えてみることにする。ここでわれわれが確認したいことは、対象における変化とは t_1 の時間に M で「ある」ものが t_2 の時点では N で「ある」といった、2つの「ある」とされるものの差違ではない。あくまで、変化にとって M が N に「なる」ことが本質的で、

このような変化は過去から現在、現在から未来へとといった時制の移り変わりを伴った時間の「動性」が必須である。また、一方で時間が過去から現在、現在から未来へと動いてゆきためには、対象における「なる」ことによって示されるような変化が必要であると考えられる。たしかに、ある対象が何の変化も伴わずに時間が経過をし、その対象に関する通時的同一性をわれわれは指摘することができる。しかし、このときには、同時に世界内に存在する他の何らかの対象に変化が生じており、その対象の変化において生じている時間の流れを最初の対象にも適応しているのである。このことから、仮に宇宙全体が凍結して宇宙の中の何事にも変化がないとすれば、そのときにはもはや時間が流れてゆくことはないことになる¹¹⁾。

しかし、凍結した宇宙では時間が流れないというこの考え方には、異論も提出されている。そのような異論として、有名な思考実験を以下に紹介する¹²⁾。今、宇宙は A, B, C という3つの領域に分かれていたとして、A は2年ごとに、B は3年ごとに、C は5年ごとに春から次の春までの1年間凍結することになっていたとする。このとき、ある領域が凍結していてもその領域にも時間が経過していたことを、別の領域にいた者が指摘することができる。そして、30年に1回は3つの領域が全て凍結するという時期がやってくる。しかし、このときに、われわれはこれまでの経験則から誰も気づかない間に1年間が経過したと類推するに違いない。したがって、宇宙全体が凍結したとしても、時間は流れているとこの思考実験では主張される。

この思考実験では認識論的に時間の流れを捉えるべきではなく、たとえ過ぎ去った1年を誰一人として気付かなくとも1年は過ぎ去ったものとして、時間の流れを存在論的に捉えるべきとしている。たしかに、このような存在論的な把握には賛成するべきであろう。しかし、われわれはここで、それまでの1年の流れの中でもっとも肝要な点を確認するべきである。それは、その30年目が到来するまで、時間の流れは何によって作られていたかという点であり、それにあたるものは、それぞれの時期において凍結を免れた宇宙であるということである。つまり、時間の流れが存在するときにはその流れを生み出すような何らかの事象の変化を伴った宇宙が存在していなければならないが、30年目が到来する前までは凍結した宇宙があっても別のどこかの宇宙において時間の流れは生み出されていたのである。そして、時間の流れを生み出す何らかの事象の変化を伴う宇宙は、同時にその時間の流れを担う宇宙でもあったはずである。しかし、30年目には、時間の流れを生み出す宇宙も、時間の流れを担う宇宙も存在しない。

このことが示すことは、この思考実験の創作者とは異なる結論であり、30年目に宇宙全体が凍結してその中のどの対象においても変化が生じないときには、もはや全宇宙で時間は停止したままとなる。

死と共に停止する時間の流れ

今、一人の人間が死に臨んでいるとき、クオリアの凝集塊は外部との連絡を完全に断たれた小宇宙となる。そして、死が最初段階に入り、淡いクオリアの凝集塊がそれ以上の変化を止めたとすれば、その小宇宙の中では時間はもはや流れることはない。したがって、ヒトはいったん死が訪れたあとその死が永遠に続くといった言述は誤りであり、自身をクオリアの凝集塊とする限り、自身にとって時間は死の時点をもって停止する。もし、死後の永遠という言葉が当てはまるものがあるとすれば、それは死によって単純な有機物にまで分解されていく身体の方であろう。すなわち、物理的な対象である身体の痕跡としての有機物は、同じく物理的な対象である外界にある様々な物質が変化をして時間が永遠に流れるときには、いつまでも身体の痕跡として分解を遂げながらも永遠に存在し続けるであろう。

もっとも、この身体の永遠の死についても、その永遠に続くということを否定することが生じうるかもしれない。なぜなら、もし死後の時間が無限であれば、生前の身体と分子や原子のレベルまで数的同一性と質的同一性を備えた身体が偶然に出現する確率はゼロでなく、このときには再び同一の人間がこの世界に再現することになる。このような再現は、むしろ無限の回数にわたって起こりうると思われる。ただし、以前

の章で述べたようにこの宇宙の存続がきわめて長いとしても、時限付きの存続であるとするれば、自分と同じ身体が再び出現することがあるかどうかは不明であり、たとえ出現することがあったとしてもその出現は有限の回数となる。

いずれにせよ、ここでわれわれが確認すべき重要な点は、ヒトが死に臨むとき、ある時点からクオリアの凝集塊の変化は停止し、その凝集塊にとっての時間も停止するという点である。したがって、死後に永遠の死が待ちうけるということは、一人称としての死を考える限りはありえないことになる。このことから、もし仮に人間における不死の意味を、「ヒトは死によって完全な非在となり、かつ、死後にはその非在が未来永劫に続く」といった死に対する考え方に対する否定として理解するならば、たしかに一人称の自分の死については不死の帰結が得られるのかもしれない。しかし、一方で、人間が不死であることの意味を、永遠に続く生の営みが得られるものとして理解するならば、何一つ不死は得られていないことになる。つまり、死の到来によってクオリアとして極微となった私にとって死後に用意されているものは、内容をほとんど欠いた時間が完全に停止した宇宙である。結局、私の小宇宙は、死の時点で凍結する。

エピローグ

本小論の以前の章において、人類の科学技術の進歩によってもたらされるかもしれない、人間の一時的な不死の可能性について述べた。しかし、このような

脚注1) 尚、法的なレベルでの胎児におけるヒトに準じる資格獲得は、その時点で母体の外に出たと仮定したときの生存能力を基準にして定められてきたと言える。このため、その生存能力は医療技術の進歩によって変わることから、法的なヒトに準じる資格獲得の時期もこれまで何度か変更されてきた。ただし、われわれが留意すべき点は、本小論が問題とするクオリアの胚胎はこういった体外での生存能力と、さしあたっては別個の問題であるという点である。

脚注2) もっとも、渡辺(1996)が主張する「遍在転生観」では、転生のタイミングは、本小論で述べるような死や生誕の時期を意味するのではなく、そのタイミングは全ての時間において存在するとされている。

脚注3) かつて、「多重実現可能性」と呼ばれた、脳と心がトークン同一性をもつとする主張があった。この

主張では、ヒトのaという神経の発火でもイヌのbという神経の発火でも同じ痛みクオリアMを生じしうるとして、その説明にあたってそれぞれのトークンとしての神経発火にトークンとしての痛みクオリアが対応しうるとした。しかし、本小論ではクオリアはトークンとして成立しないとする立場であり、多重実現可能性というアイデアは受け入れられないことになる。一方、「非法則一元論」と呼ばれる主張では、ヒトのaという神経の発火には、痛みクオリアMでも痒みクオリアNでも様々なクオリアが対応しうるとされた。しかし、この主張においてもクオリアをトークンとして捉えていることが含意されていることから、本小論ではその主張も受け入れられないことになる。

可能性は、少なくとも二十一世紀前半の時代に生きるわれわれに該当するものではない。現在地球上に存在する全ての人間は、三大疾病のどれかや他の疾病で、あるいは、突然の事故や災害で死を迎えるであろう。しかし、最終章で述べた限定された意味での人間の不死は、そのような時代の制約は受けない。すなわち、そこで述べられていることは、現在に生きているわれわれ全てに該当する事柄である。

最後に、本小論のタイトルである「ヒトの死は不可避か」という問いに、本小論での議論はどれだけ答を出したことになるのか確認したい。もし、「ヒトの死」が三人称の死にあたるものだとすれば、死の進行で変化を止めたクオリアの凝集塊は、死者以外の他者にとってはそのままの状態で永遠の時間を刻むことになる。しかし、それは私にとっての永遠の時間とはならない。なぜなら、クオリアの凝集塊は、実のところ、これを一人称で語ったときのみ私としての資格をもつのであり、そのとき、私の死についても語るができるようになるからである。このように、いったん死を一人称で語るという迂回を経た後に、はじめてわれわれにとっての死が浮かび上がることになるが、そのときには、時間を喪失した存在としての私の死が露わとなる。

このことから、死の核心を私の非在化の永遠の継続と捉えたとき、それを否定するものとして「死は避けうるもの」と述べることができよう。ただし、死の核心をこれ以外のいずれかのものとする思考にとっては、本小論の中に「死は避けうるもの」とする結論はどこにも見つからない。このことからすれば、「死は避けうるもの」という言葉は、慎重にかつ控え目に使用されるべきなのかもしれない。

参考文献

- 1) 新山喜嗣：ヒトにとって死は不可避なのか (その1) バイオロジーからの検討 . 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要24(2)：1-13, 2016
- 2) 波平恵美子：いのちの文化人類学. 新潮社, 東京, 1996
- 3) 芳賀 登：葬儀の歴史. 雄山閣, 東京, 1991
- 4) Chalmers DJ: The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory. Oxford University Press, Oxford, 1996 (林一 訳『意識する心 脳と精神の根本理論を求めて』, 白揚社, 東京, 2001)
- 5) Davidson D: Essays on Actions and Events, Clarendon Press, Oxford, 1980 (服部裕幸, 柴田正良 訳『行為と出来事』, 勁草書房, 東京, 1990)
- 6) 渡辺恒夫：私の死の謎 世界観の心理学で独我を超える. ナカニシヤ出版, 京都, 2002
- 7) 三浦俊彦：多宇宙と輪廻転生 人間原理のパラドックス. 青土社, 東京, 2007
- 8) Derek P: Reasons and Persons. Clarendon Press, Oxford, 1984 (森村進 訳『理由と人格 非人格性の倫理へ』, 勁草書房, 東京, 1998)
- 9) 福岡 伸一：動的平衡 生命はなぜそこに宿るのか. 木楽舎, 東京, 2009
- 10) Block N: Consciousness, accessibility, and the mesh between psychology and neuroscience. Behavioral and Brain Sciences 30: 481-499, 2007
- 11) McTaggart JME.: The Unreality of Time. Mind 17: 457-474, 1908
- 12) Shoemaker S: Time without Change. The Journal of Philosophy 66: 363-381, 1969

Whether human death is inevitable (Part 2) : Intersection of clinical medicine and metaphysics

Yoshitsugu NIIYAMA

Graduate School of Health Sciences, Akita University

Abstract

Perhaps the death that many people consider can be characterized as the time where one's qualia, or subjective experience of events, disappears. These qualia accompany each instance of activity in the brain. From this line of thinking, when a body, including the brain, is destroyed by death, one's qualia will disappear at the same time. However, qualia are not fundamentally an object that we can count or quantify. In addition, qualia, unlike a general individual, are not bound to a specific physical location or time. Thus, qualia do not disappear like an individual; when someone dies, qualia that were formerly changing quickly cease to change. Consider also that time is generated by changes. Therefore, when death halts the change in qualia, the flow of time is also halted. Thus, it is a mistake to regard death as the eternal disappearance of qualia, as even if death comes, qualia will simply cease to flow in time. Therefore, it is impossible that one dies forever.